R7 楡木小学校　学校通信
No. 3
なりたい自分になる！
In 楡木サラダボウル
令和７年４月１８日
文責　余宮

本日の授業参観、懇談会にはたくさんの保護者の方にご参会いただき、ありがとうございました。

想像の距離を延ばす

先日の天気は、大荒れ。雷まで鳴る春の嵐の日がありました。下校時間にかからなければいいなと思っていたところ、しんじさん（仮名）が「てるてる坊主」をつくった、と話しかけてきました。そうだよね、下校時に雨はいやだもんね。もしかしたら、この後遊びに行くことを考えているのかな、と勝手に想像していると、しんじさんの本意はどうもそうではない。

「だって、お友達とか…特に低学年とか雨の中に帰るのは大変じゃないですか」

だから、雨がやんでほしい、と。

心から感動しました。とともに、自分のことはさることながら、お友達のことや目の前にはいない低学年のことまで想像力を広げるしんじさんの優しさに、私は大変驚きました。

人間関係は、想像力の距離感が問題だと、私は思います。

哲学には、人間を惑わす問いがいくつもありますが、その中で「他者の痛みがわかるか」という難問があるそうです。経験がないけがや病気などの痛みは、なかなか共感できない。目には見えない心の痛みやけが、いわゆる苦悩のような心の動きについては、言わずもがな。苦痛は、やはり個人的なもので他者には共感できないのではないか。う～ん。難問です。

対して、苦痛に関してこんな実験があったそうです。その実験では、腹痛などを起こしてしまった人に対して、一方は共感の声掛けを行った場合と、もう一方は全く共感的な態度も見せなかった場合の、苦痛の度合いを調べたそうです。結果は、これも言わずもがな、共感してもらった方が、共感的な態度をしなかった場合に比べて、優位に苦痛の度合いが減ったとのこと。

突き詰めれば、人の痛みはわからないといわざるを得ないかもしれません。しかし、わからないかもしれないんだけど、相手がどんな気持ちでいるのか、どんな痛みを経験しているのか想像し、心から共感することで相手の苦痛は幾分和らぐという現実。

人類は、遺伝子レベルで圧倒的に社会的な生き物だ、といわれます。この実験は、人はその遺伝子レベルで他者からの共感を欲している、という証左なのかもしれません。

私たちのどのような行動も、社会との何らかのかかわりをもつ、という感覚が必要です。だから、社会が私に何かをやってくれることを期待するだけではなく、私が社会に対して何らかのことができないものかと思い遣る、そのメンタリティーが社会を生きる私たちになくてはならない資質なのではないかと思います。

そのために、想像力の距離を延ばしたい。例えば、しんじさんのように雨が降ったときに自分ではない誰かが困るかもしれないとか。例えば、給食を食べている時に、おいしさとともに料理を作ってくれた人や野菜などの生産者の方々の思いを考えるとか。例えば、公園でお菓子の食べかすを見つけた時に、このプラスチックごみがもしかしたら大海を泳ぐウミガメの誤食を招き、大切な命がなくなってしまうのではないかと、ごみを拾い持ち帰るとか。

しんじさんのように、想像力の距離が今よりちょっとだけ延びた時、社会はちょっとだけよくなっているのではないかなあ～と想像してみると、とても気持ちがいい。その距離感が延びることを、もしかしたら人としての成熟というのかもしれないと、私は思うのです。